高知女子大学看護学会誌　VOL.35,NO.1,pp1～8　2010

原著論文

壮年期女性の死生観尺度の作成

DEVELOPMENT OF A SCALE TO MEASURE ATTITUDES TOWARD DEATH IN MIDDLE-AGED WOMEN

植　田　喜久子（Kikuko Ueda）*

要　　約

本研究の目的は、壮年期女性の発達課題や特徴と関連し、わが国の文化背景を考慮したDeath Educationの方法論を探究するために、死生観尺度を作成することである。死生観の操作的定義は、「死と生に対する感情や考え方。人生をどのように生き、どのように死を迎えたいか、死後どうなるかというその人自身の考え方」とした。Item Pool 163項目は、女性18名の調査と文献検討から作成した。予備調査Ⅰ、Ⅱにより原案27項目を作成した。本調査では、女性306名の調査から妥当性・信頼性の検討を行った。因子分析の結果、『死への恐怖・不安・悲哀』『死への関心』『死後の世界観（霊や魂の存在）』『解放としての死』『死からの回避』『人生における目的意識』『死後の世界観(死後の存在)』を抽出した。クロンバックのα係数は、0.75と内的整合性は確保された。本尺度と平井（2000）の下位尺度とは、r＝－.44～－.86（p＜.01）と正の有意な相関関係を示し基準関連妥当性を確認した。結論として、7因子27項目からなる壮年期女性の死生観尺度が作成され、概ね妥当性と信頼性が確認された。

キーワード：壮年期女性、死生観、信頼性、妥当性

Ⅰ．は　じ　め　に

Death Educationは、死の準備教育あるいは死生観の教育である。その目的は、死に対する恐怖や嫌悪の是正であると同時に、生き方を再構築し、自分らしい終末や親や配偶者の看取りとそれらの準備を行うことである。壮年期女性の発達は、ケア役割の問題、関係性の問題、ライフスタイルの相違を特徴とすることから（岡本，1999)、壮年期女性のDeath Educationは、壮年期女性の発達課題である「関係性の変化への対処」と「ケア役割の拡大」を促すプログラムであることが必要である。

わが国では、Death Educationを死生観との関連から根本的に検討しておらず、その方法論はいまだ明らかではない。壮年期女性は、自らの死生観を伝えていくなど他者の生活を方向づける役割を担うことからも壮年期女性の死生観を明らかにすることは重要である。一方、死生観という用語は目常的に使用されるが一定の所見に至っていない。また、わが国における死生観尺度は、金児（1994)、河合（1996)、丹下（1999)、平井（2000，2001）により作成されてきたが、壮年期女性を調査対象者としていない。

そこで、本研究では、壮年期女性の発達課題や特性と関連し、わが国の文化的背景を考慮したDeath Educationの方法論を探究するために、壮年期女性の死生観尺度を作成することを目的とした。

Ⅱ．壮年期女性の死生観尺度の作成過程

1．本研究における死生観の操作的定義

本研究における死生観の操作的定義は、「死と生に対する感情や考え方。人生をどのように生き、どのように死を迎えたいか、死後どうなるかというその人自身の考え方」とした。壮年期女性の死生観尺度を作成するにあたり、平井（2000）の『死後の世界観』『寿命観』『人生における目的意識』『死からの回避』『死への関心』『解放としての死』『死への恐怖・不安』という下位尺度を基盤とした。その理由は、日本人の

*日本赤十字広島看護大学

生と死に対する感情や考え方を多次元的に捉えることができると判断したからである。なお、本研究では、壮年期女性を40～60歳とした。

２．死生観尺度原案の作成

１）Item Poolの作成

Item Poolは、壮年期女性18名の文章完成法による調査および壮年期女性や死生観に関する13文献から163項目を作成した。内訳は、『死後の世界観』28項目、『寿命観』12項目、『人生における目的意識』29項目、『死からの回避』16項目、『死への関心』39項目、『解放としての死』11項目、『死への恐怖・不安』28項目であった。

２）予備調査Ⅰ、Ⅱによる死生観尺度原案の作成

尺度の内容妥当性は、ImalとAtwoodの手法（lmal,M.A. and Atwood,J.R.,1988）を用いて検討し、48項目を作成した（予備調査Ⅰ）。調査対象者は、①Women's Healthの研究者、②尺度を作成したことがある研究者、③壮年期女性や高齢者に関する研究者であることを条件に依頼できた看護系大学教員10名、他学部や福祉専門職者７名の17名であった。17名が「適切である」と回答した割合により項目を検討した。

つぎに、2003年11月に、壮年期女性140名に郵送法による自記式質問調査票による調査に基づき項目分析、妥当性・信頼性の検討を行い、尺度原案27項目を作成した（予備調査Ⅱ）。尺度原案は、第１因子『死への関心/死からの回避』８項目、第２因子『死の恐怖・不安・悲哀』６項目、第３因子『死後の世界観』６項目、第４因子『解放としての死』３項目、第５因子『寿命観』２項目、第６因子『人生における目的意識』２項目で構成された。なお、『死への関心／死からの回避』は、逆転の因子負荷量を示した。

３.本調査

１）対象者：広島県H市40～60歳の女性520名。回収数316名。有効回収数および有効回答率は306名（58.8％）。なお、38歳、61歳の回答者２名を分析対象に含めた。

２）調査期間：2004年10月１日～11月30目

３）調査内容

（１）個人特性:年齢、婚姻状況、家族構成、ライフコース、職業の有無と種類、自我発達のレベル、健康状態、ライフイベント

（２）死生観尺度

①本尺度原案27項目:回答は、「そう思わない」を１点、「あまりそう思わない」２点、「どちらともいえない」３点、「まあそう思う」４点、「そう思う」を５点とする５件法で評定した。

②DAP（Death Attitude Profile）日本語版（河合，1996）:河合により日本語版を作成された『積極的受容』４項目、『回避的受容』６項目、『中立的受容』４項目、『死の恐怖』７項目の21項目からなる。回答は、「そう思わない」を１点、「そう思う」を５点とする５件法で評定した。

③平井の死生観尺度（平井，2000）:『死後の世界観』４項目、『死への恐怖・不安』４項目、『解放としての死』４項目、『死からの回避』４項目、『人生における目的意識』４項目、『死への関心』４項目、『寿命観』３項目からなる。回答は、「あてはまる」を１点、「あてはまらない」を７点とする７件法で評定した。

４）分析方法

（１）項目分析

まず、①各項目の平均値1.5以下または4.5以上、②５％以下の回答肢がある項目を得点分布に偏りがあると考え、項目の判別力、正確さや明瞭さを検討した。

（２）妥当性の検討

①構成概念妥当性の検討

項目分析後の項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。因子負荷量が .35以上となる項目を選択基準とした。その後、因子の解釈を行い、本尺度の構成概念妥当性を検討した。

②基準関連妥当性の検討

ア．本尺度と本研究で基盤とした平井の死生観尺度の関連を検討するために、下位尺度の合計点を算出し、Pearsonの相関係数（r）を算出した。

イ．本尺度『死への恐怖・不安・悲哀』７項目とDAP目本語版の下位尺度『死の恐怖』７項目について、Spearmanの相関係数（r_s）を算出した。

（３）信頼性の検討

本尺度全体および下位尺度の内的整合性をクロンバックのα係数および下位尺度と項目間についてPearsonの相関係数を用いて評価した。

なお、統計分析には統計パッケージSPSS12.0Jを用いた。

５）倫理的配慮

質問調査票に調査目的と自由意思によることを明記した。また、調査は無記名で行い、返送を持って承諾を得たと判断した。高知女子大学研究計画審査会の承認を得た。

Ⅲ．結　　果

１．対象者の概要

対象者306名の平均年齢50.13（SD±5.57）歳。婚姻状況は、既婚86.6％、未婚4.9％、死別・離別8.2％。有職者72.5％、無職25.2％。健康状態では、「とても健康」11.1％、「まあまあ健康」70.2％、「あまり健康でない」16.7％、「健康ではない」2.0％。ライフコースでは、「仕事継続型」25.2％、「再就職型」45.1％。家事専業型24.5％であった。

２．本尺度原案27項目の検討

１）項目分析（表１参照）

得点分布の偏った項目として平均値1.5以下、4.5以上の項目を抽出したが、該当する項目はなかった。５％以下の回答肢がある項目は、「２．私は、死ぬまでに何をするかが大切である」「15．私は、死について考えることは縁起が悪いと思う」「27．私は、年齢順に死にたい」の３項目であった。

２）構成概念妥当性の検討

尺度原案27項目の因子分析の結果、固有値１以上の成分は７個抽出された（表２参照）。尺度原案27項目がどのような構造を示すのかを検討した。因子負荷量が比較的大きいものの目安である .35以上の因子を採用した。また、因子負荷量 .35以上が２つ以上ある項目は因子負荷量が大きい方を採用した。しかし、「１．私は、わが国の平均寿命くらいは生きるような気がする」は、因子負荷量 .32であったが、他の因子負荷量より最も大きく、.35に近い数値であったこととで採用することとした。

『死後の世界観』６項目は、『死後の世界観（霊や魂の存在）』３項目と『死後の世界観（死後の存在）』３項目に分かれた。『寿命観』２項目は、『死への恐怖・不安・悲哀』１項目と『人生における目的意識』１項目にそれぞれ分かれた。『死への関心／死からの回避』８項目は、『死への関心』５項目と『死からの回避』３項目に分かれた。

４）基準関連妥当性の検討

本尺度と平井の死生駅度と下位尺度の相関係数（r）は、－.44～－.86（p＜.01）であった（表３参照）回答肢が逆転していることから、正の比較的強い相関がある。

本尺度『死への恐怖・不安・悲哀』とDAP日本語版『死の恐怖』の相関係数（r_s）は、最小値 .14（p＜.05）、最大値 .67（p＜.05）であった（表４参照）。いずれかの項目との相関係数が、.4以上であった。しかし、DAP日本語版の「１．暴力によって死んでいくことが心配だ」の項目と本尺度との相関係数（r_s）は、.06～.14（p＜.01）であった。

５）信頼性の検討

尺度全体のクロンバックのα係数は、.75であった。また、第１因子から順に、.83、.78、.75、.69、.59、.41、.64であった。また、本調査で得た下位尺度と項目間の相関係数（r）は、.52～ .83の範囲であった（p＜.01）。

Ⅳ．考　　察

１．壮年期女性の死生観尺度の特徴

段階を踏んだ調査をもとに、壮年期女性の死生観について項目を作成し、７因子27項目を得た。つまり、第１因子『死への恐怖・不安・悲哀』７項目、第２因子『死への関心』５項目、

表１　壮年期女性の死生観尺度27項目の平均値と標準偏差

壮年期女性の死生観の質問項目(27items)	予備調査Ⅱにおける下位尺度	対象者			そう思わない	あまりそう思わない	どちらとも言えない	まあそう思う	そう思う
		N	Mean	SD					
１．私は、わが国の平均寿命くらいは生きるような気がする	寿命観	306	3.18	1.15	7.5	20.3	35.3	20.9	16.0
２．私は、人間は死ぬまで何をするかが大切である	人生における目的意識	306	4.27	0.85	1.0	3.6	9.8	38.9	46.7
３．私は、死について考えないようにしている	死への関心／死からの回避	306	2.99	1.15	13.1	17.6	36.9	22.2	10.1
４．私は、死はすべてのことを解放すると思う	解放としての死	305	2.91	1.27	15.7	23.0	30.2	16.4	14.8
５．私は、死後の世界ですでに死亡した人にあえると思う	死後の世界観	305	2.80	1.29	21.6	17.7	32.1	16.4	12.1
６．私は、死は苦痛や苦悩から解放すると思う	解放としての死	304	3.25	1.20	11.2	13.2	31.3	28.3	16.1
７．私は、死は恐ろしい現実だと思う	死への恐怖・不安・悲哀	305	2.81	1.29	19.7	23.3	26.2	18.4	12.5
８．私は、死後の世界は美しいと思う	死後の世界観	305	2.73	1.02	13.8	21.6	48.2	10.5	5.9
９．私は、死について考えることがある	死への関心／死からの回避	305	3.47	1.26	7.5	19.3	16.1	32.8	24.3
10．私は、自分の人生において何が重要かを知っている	人生における目的意識	300	3.28	1.04	5.7	14.7	37.3	30.7	11.7
11．私は、死についての考えが浮かんでくると、別のことを考えるようにしている	死からの回避	304	2.48	1.16	23.7	30.9	24.7	15.5	5.3
12．私は、死について考える機会がある	死への関心／死からの回避	304	3.34	1.35	11.8	18.8	18.4	25.7	25.3
13．私は、死は安らかな眠りだと思う	解放としての死	306	3.44	1.19	5.9	10.5	35.9	29.1	18.6
14．私は、自分の死を考えると怖いと思う	死への恐怖・不安・悲哀	306	3.19	1.24	10.8	20.9	22.5	30.1	15.7
15．私は、死について考えること縁起が悪いと思う	死からの回避	305	1.95	0.97	41.0	30.8	22.0	4.9	1.3
16．私は、年を増すごとに死について考えることが多い	死への関心／死からの回避	304	3.17	1.22	11.5	18.8	25.3	30.3	14.1
17．私は、霊や魂は供養することで安らかになると思う	死後の世界観	306	3.66	1.13	5.6	9.2	25.8	32.7	26.8
18．私は、自分らしい死に方について考える	死への関心／死からの回避	306	3.20	1.21	9.8	19.6	27.1	27.5	16.0
19．私は、身近な人の死を考えると怖いと思う	死への恐怖・不安・悲哀	305	3.53	1.30	9.5	14.8	17.0	30.8	27.9
20．私は、霊や魂は生き続けると思う	死後の世界観	306	3.32	1.22	10.1	10.8	37.3	20.3	21.6
21．私は、死に対して漠然とした不安がある	死への恐怖・不安・悲哀	304	3.24	1.25	10.9	18.4	24.3	28.9	17.4
22．私は、死は単に終わりでなく、新しい生のはじまりだと思う	死後の世界観	305	2.77	1.19	16.7	22.3	39.7	9.5	11.8
23．私は、先祖が自分や家族を守っていると思う	死後の世界観	305	3.83	1.14	5.6	7.2	19.7	33.8	33.8
24．私は、死について周辺の人々と話すことがある	死への関心／死からの回避	304	2.86	1.25	17.1	25.7	20.4	28.0	8.9
25．私は、私の死後、身近な人が幸せに生きてくれるか心配である	死への恐怖・不安・悲哀	304	3.73	1.29	8.6	12.2	12.5	30.9	35.9
26．私は、自分の死を考えると悲しい	死への恐怖・不安・悲哀	305	2.84	1.33	19.7	23.3	26.6	14.8	15.7
27．私は、年齢順に死にたいと思う	寿命観	306	4.01	1.14	4.9	6.5	15.4	28.8	44.4

単位：％

表２　壮年期女性の死生観尺度27項目の因子負荷量

No.		因子負荷量						
		因子１	因子２	因子３	因子４	因子５	因子６	因子７
第１因子：死への恐怖・不安・悲哀								
14	私は、自分の死を考えると怖いと思う	**.687**	.048	.075	-.137	.402	.026	-.133
26	私は、自分の死を考えると悲しい	**.679**	.048	-.013	-.100	.234	.139	.002
21	私は、死に対して漠然とした不安がある	**.670**	.218	.081	-.116	.246	-.124	-.139
19	私は、身近な人の死を考えると怖いと思う	**.659**	.084	.101	-.020	.065	-.091	.046
7	私は、死は恐ろしい現実だと思う	**.634**	.015	-.028	-.117	.384	-.033	-.066
27	私は、年齢順に死にたいと思う	**.508**	-.027	.023	.035	-.103	.058	.072
25	私は、私の死後、身近な人が幸せに生きてくれるか心配である	**.455**	.188	.113	.049	.053	-.003	-.044
第２因子：死への関心								
12	私は、死について考える機会がある	.074	**.788**	-.018	.064	-.149	.096	-.130
9	私は、死について考えることがある	.116	**.786**	-.085	-.027	-.119	.008	.049
16	私は、年を増すごとに死について考えることが多い	.321	**.618**	-.049	.008	.134	-.021	.034
18	私は、自分らしい死に方について考える	.056	**.539**	.022	.088	-.007	.061	.037
24	私は、死について周辺の人々と話すことがある	-.029	**.480**	.141	.015	-.074	.110	.055
第３因子：死後の世界観（霊や魂の存在）								
23	私は、先祖が自分や家族を守っていると思う	.044	-.006	**.763**	-.011	-.008	.071	.089
17	私は、霊や魂は供養することで安らかになると思う	.121	.005	**.721**	-.021	.031	-.002	.012
20	私は、霊や魂は生き続けると思う	.156	.038	**.611**	.038	.033	.065	.284
第４因子：解放としての死								
4	私は、死はすべてのことを解放すると思う	-.062	.004	.036	**.748**	.054	.044	.069
6	私は、死は苦痛や苦悩から解放すると思う	-.034	.131	-.043	**.698**	-.036	-.048	.135
13	私は、死は安らかな眠りだと思う	-.179	.021	.192	**.438**	-.072	.346	.021
第５因子：死からの回避								
11	私は、死についての考えが浮かんでくると、別のことを考えるようにしている	.260	-.005	.011	.011	**.565**	-.110	-.021
3	私は、死について考えないようにしている	.086	-.297	.079	.184	**.546**	.134	-.162
15	私は、死について考えること縁起が悪いと思う	.232	-.105	-.030	-.087	**.521**	-.060	.140
第６因子：人生における目的意識								
10	私は、自分の人生において何が重要かを知っている	-.111	.227	.038	-.114	-.131	**.617**	.085
2	私は、人間は死ぬまで何をするかが大切である	.044	.081	.156	.002	-.015	**.495**	-.028
1	私は、わが国の平均寿命くらいは生きるような気がする	.059	-.026	-.060	.139	.046	**.315**	.094
第７因子：死後の世界観（死後の存在）								
8	私は、死後の世界は美しいと思う	-.115	.096	.358	.191	.018	.099	**.632**
5	私は、死後の世界ですでに死亡した人にあえると思う	.029	.083	.412	.211	.090	.064	**.438**
22	私は、死は単に終わりでなく、新しい生のはじまりだと思う	-.049	-.060	.341	.071	-.174	.144	**.377**
	固有値	3.05	2.43	2.03	1.47	1.46	1.00	0.98
	寄与率（%）	11.30	9.01	7.52	5.46	5.41	3.71	3.65
	累積寄与率（%）	11.30	20.31	27.83	33.28	38.69	42.40	46.05

表３　本下位尺度と平井の死生観尺度とのPearsonの相関係数

本下位尺度	平井の死生観尺度	p値
死への恐怖・不安・悲哀	－.86	***
死への関心	－.70	**
死後の世界観（霊や魂の存在）	－.43	**
解放としての死	－.63	***
死からの回避	－.67	***
人生における目的意識	－.54	**
死後の世界観（死後の存在）	－.56	**

**:p＜.01　　***:p＜.001

表４　本尺度『死への恐怖・不安・悲哀』とDAP日本版『死の恐怖』とのSpearmanの相関係数

『死への恐怖・不安・悲哀』７項目	1．暴力によって死んでいくことが心配だ	5．苦しんで死ぬのがこわい	9．私にとって、死の最終的な事実におくせず立ち向かうことは難しいと思う	13．時ならぬ時に死んでいくのではないかと思う	16．私はゆっくりと死んでいくのがこわい	18．人生は短いと思うと心が揺らぐ	20．自分自身の死を予想すると不安になる
7．私は、死は恐ろしい現実だと思う	.09	.40**	.32**	.38**	.28**	.34**	.58**
14．私は、自分の死を考えると怖いと思う	.06	.46**	.40**	.38**	.28**	.35**	.67**
19．私は、身近な人の死を考えると怖いと思う	.10	.38**	.24**	.42**	.23**	.18**	.46**
21．私は、死に対して漠然とした不安がある	.14**	.41**	.43**	.41**	.21**	.35**	.64**
25．私は、私の死後、身近な人が幸せに生きてくれるか心配である	.14**	.19**	.28**	.27**	.19**	.25**	.34**
27．私は、年齢順に死にたいと思う	.07	.20**	.23**	.24**	.09	.21**	.26**
26．私は、自分の死を考えると悲しい	.13*	.30**	.32**	.36**	.23**	.42**	.49**

**：p＜.01　　*：p＜.05

第３因子『死後の世界観（霊や魂の存在）』、第４因子『解放としての死』３項目、第５因子『死からの回避』３項目、第６因子『人生における目的意識』３項目、第７因子『死後の世界観（死後の存在）』３項目であった。

第１因子『死への恐怖・不安・悲哀』は、死の恐怖・不安のみでなく、自分や身内との死別の悲しみを測定し、身内との関係性から測定する項目を備えている。原案で『寿命観』に含まれていた「私は、年齢順に死にたいと思う」は、『死への恐怖・不安・悲哀』の項目となった。わが国では、子どもが親より先に死亡することを忌み嫌う風潮がある。死は年齢順ではないと現実を認識しているだけに、年齢順に死にたいという思いが『死への恐怖・不安・悲哀』に含まれたと考えた。第２因子『死への関心』は、

死生観を加齢による変化や身近な人と死について話し合うなどの関係性から明らかにする項目が含まれた。

尺度原案の『死後の世界観』は、意味ある２つに分かれた。第３因子『死後の世界観（霊や魂の存在）』は霊や魂の存在に関する考え方を、第７因子『死後の世界観（死後の存在）』は死後も生き続けるもう一つの世界が存在するという考え方を明らかにする項目が含まれた。第３、４、５、７因子は、日本人の死生観（阿部，2001）を測定できる項目でもある。第６因子『人生における目的意識』は、人生をどのように生きたいかを明らかにする項目が含まれた。尺度原案で『寿命観』に含まれた「私は、わが国の平均寿命くらい生きるような気がする」は、『人生における目的意識』の項目となった。

以上のことから、本尺度は、壮年期女性の発達課題やライフスタイルに密着して死生観を把握できると考えた。また、本尺度は、平井(2000)、丹下（1999）の死生観下位尺度と共通性があり、日本人の死生観を構成する「死の恐怖・不安」、「死後の世界」、「人生」に関することの３つを含んでいることから、多次元的に死生観を測定できると考えた。

２．項目分析

回答肢のいずれかが５％以下の項目が３項目あったが、他の項目分析や妥当性や信頼性の結果において除外する項目にならなかったことから、除外しないこととした。

３．本尺度の妥当性

因子負荷量からみると７因子の抽出がみられ、かつ平井の死生観尺度とほぼ一致した。累積寄与率が第7因子まで46.0％だったことは、死生観という多様かつ抽象的な概念を測定していると考えた。平井の死生観尺度との相関係数が、r＝－.44～－.86（p＜.01）を示したこと、DAP日本語版『死の恐怖』との相関では、すべて正の相関を示し、いずれかの項目の相関係数（r_s）が、.4以上であった。しかし、DAP日本語版「１．暴力によって死んでいくことが心配だ」の項目とは、相関係数が小さく相関がなかった。このことから基準関連妥当性は、概ね確保されたと考えた。予備調査Ⅱ、本調査の２回の調査にわたり概ね再現性がみられ、妥当性は確保されたと考えた。

４．信頼性の検討

本尺度の信頼性では、クロンバックのα係数が .75と比較的高い。第６因子のみ .41とやや低いが、第１、２、３因子は、.70以上、第５、７因子は、.6以上を満たしていた。また、下位尺度と項目間の相関では、すべて中程度以上の有意な正の相関を示した。したがって、ある程度の内的整合性が確認され、信頼性は支持された。

Ⅴ．本尺度の活用と今後の課題

本尺度による死生観は、７つの下位尺度全体の名称と考える。したがって、尺度27項目の総得点を求めて死生観をあらわすのではなく、下位尺度ごとに死生観の諸相を把握することが望ましい。

今後の課題として、Death Educationのプログラムの作成やその効果判定など本尺度の適用範囲を検討することである。また、今回、特定の地域の壮年期女性を対象とした調査であったことから、今後、地域特性を考慮した対象者に調査を行い、本尺度を洗練化していく必要がある。

Ⅵ．結　　語

壮年期女性の死生観尺度の作成を試みた結果、７因子27項目からなる尺度が作成され、概ね妥当性と信頼性が確認された。今後さらなる妥当性・信頼性の検討を行い、尺度の洗練化の必要がある。

参考文献

１）阿部眞司：日本人の死生観は変わったか？，日社精医誌，10，83-91，2001.
２）Deeken，A.：東洋と西洋の死の考え方，死の臨床，10(1)，63-71，1987.
３）Gesser，G.，Wong，P.T.，&Reker，G.T.：(1987-88)：Death Attitudes Across the Life-Span：The Development and Validation

of the Death Attitude Profile (DAP), Omega Journal of Deathand Dying, 18, 113-128, 1987-1988.
4）早島大英：浄土真宗　本願寺派のお経，双葉社，2003.
5）平井啓，坂口幸弘，安部幸志，中西健二，柏木哲夫:末期がん患者の死生観とメンタルヘルスに関する実証的研究,「健康文化」研究助成論文集，(7)，83-93，2001.
6）平井啓，坂口幸弘，安部幸志，森川優子，柏木哲夫：死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証－，死の臨床，23(1)，71-76，2000.
7）広井良典:死生観を問い直す，ちくま書房，2001.
8）Imal，M.A.& Atwood，J.R.：Retaining qualitative validity while gaining quantitative reliability and validity：Development of the Transition to Parenthood Concerns Scale，Advances in Nursing Science，10，61-75，1988.
9）金児曉嗣：大学生とその両親の死の不安と死観，大阪市立大学文学部紀要，4(10)，1-28，1994.
10）河合千恵子，下仲順子，中里克治：老年期における死に対する態度，老年社会科学，17(2)，107-116，1996.
11）Kerr，R.B.：Meaning adult daughters attach to a parent's death. Western journal of nursing research，16(4)，347-365，1999.
12）熊谷啓：教養の宗教学，渓水社，1996.
13）岡本祐子編著:女性の生涯発達とアイデンティティ，北大路書房，1999.
14）岡本祐子：アイデンティティ生涯発達論の射程，ミネルヴァ書房，2002.
15）Parkes，C.M./桑原治雄訳：死別－遺された人たちを支えるために，メディカ出版，2002.
16）新谷尚紀:「お葬式」の日本史　いまに伝わる弔いのしきたりと死生観，青春出版社，2002.
17）杉村和美:青年期におけるアイデンティティの形成:関係性の観点からのとらえ直し，発達心理学研究，9(1)，45-55，1998.
18）丹下智香子:死生観の展開，名古屋大学教育学部紀要，42，149-156，1995.
19）丹下智香子:青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討，心理学研究，70(4)，327-332，1999.
20）山本多喜司編:人生移行の心理学，北大路書房，1992.